

PBL 型ゼミにおける学生の社会人基礎力要素の変容分析

石井雅章^{†1}

概要: 本報告は、休耕地活用という地域における実践的な課題をテーマにした PBL 型ゼミにおける学生の社会人基礎力の変容について、学生の自己評価データを用いて明らかにする。その結果、学年、年度、チームによる相違、同一学生の年次進行による変容が、有意な差で存在することが明らかになった。

キーワード: 社会人基礎力, PBL (課題解決型学習, プロジェクト型学習), 地域課題解決

Analysis of the Transformation of Student's "Fundamental Competencies for Working Persons" in The Seminar with PBL

MASAAKI ISHII^{†1}

Abstract: In this report, we analyze the transformation of students' "Fundamental Competencies for Working Persons" in the seminar with PBL, which has the theme of the practical challenge to the actual public issues in the rural community. As a result, it was found to be present in significant difference between school year, fiscal year, and the teams.

Keywords: Fundamental Competencies for Working Persons, PBL (Problem-Based Learning or Project-Based Learning), resolution of public issues in the community

1. はじめに

本報告は、報告者が前任校で実施していた課題解決型教育 (PBL) 型ゼミにおける、受講学生の社会人基礎力に関する自己評価を分析する。当該ゼミでは、3 年次・4 年次の学生が合同で「休耕地活用プロジェクト」という地域課題解決を目指したプロジェクトに取り組んでおり、受講学生は具体的なプロジェクトごとにチームをつくり、大学及び地域の様々な主体と連携して休耕地活用のしくみを構築した。また、当該ゼミでは経済産業省が主催する「社会人基礎力育成グランプリ」へ参加しており、受講学生は社会人基礎力の 12 の要素を評価項目とした自己評価を毎週おこなっていた。本報告では、2012 年度及び 2013 年度の自己評価データを分析し、学年別、年度別、所属チーム別の有意差を確認するとともに、同一学生の年次進行 (3 年次→4 年次) による社会人基礎力要素の変容がいかなるものであったかを明らかにする。

2. 休耕地活用プロジェクトと社会人基礎力

研究報告用原稿の作成から投稿までの流れは、次の通りである。

(1) 休耕地活用プロジェクト

「休耕地活用プロジェクト」は、2008 年 11 月より報告者の担当するゼミが中心となり開始したプロジェクトである。大学周辺に多数存在する休耕地を地域資源として捉え、

地元農家や行政、企業等と連携して有効に活用するしくみづくりを目的としている。他方、教育面においては、社会人基礎力として提示されている 12 の能力要素を向上させること、問題解決の実践を通じた学ぶ意欲の向上等を目的として授業を設計している。開始当初は報告者のゼミによる取り組みであったが、他学部のゼミや授業等も拡大し、現在も継続されている。

報告者のゼミでは、2010 年度以降はゼミ内プロジェクトチーム制をとり、連携主体や目的が異なる複数のプロジェクトを同時進行している。受講学生は各学年 20 人程度で、3・4 年生合同での授業にしているため、毎年約 40 人の学生が受講していた。1 チームは 8~10 名程度で構成され、毎年 4~5 チームが各プロジェクトを運営していた。

当該ゼミは毎週木曜日の 1・2 限に連続して開講していたが、上記のとおりプロジェクトチーム制をとっているため、休耕地での農作業をはじめとして、チームミーティング、連携主体との打ち合わせ等、プロジェクト遂行上必要な作業は授業時間外にもおこなわれていた。

この形式の特徴は、a) 異なる学生の学生が交わってプロジェクトを運営すること、b) 前年度の経験者 (当該年度の 4 年生) が存在すること、c) 他のチームを意識しながら自チームを運営すること、等が挙げられる。

本報告では、2012 年度及び 2013 年度の受講学生による社会人基礎力自己評価データを用いるため、表 1 及び表 2 に各年度のプロジェクトチームの実施内容をまとめておく。

^{†1} 神田外語大学
Kanda University of Foreign Studies

表 1 2012 年度のゼミ内プロジェクトチーム

チーム名	内容	連携主体
A	野菜栽培を通じた世代間交流健康づくりプログラムの実施	城西健康市民大学
B	ハーブを活用したフレッシュマンセミナーでの合同授業プログラムの実施	城西大学薬学部薬科学科
C	葉酸多含有作物（小松菜・ほうれん草）の栽培とそれを活用した薬膳レトルトカレーの製造・販売	坂戸市健康政策課, JA いるま野, カレーメーカー, 醤油メーカー, 飲食店
D	高麗川ふるさと遊歩道周辺のお花畑化と「高麗川ふるさと健康ウォーキング」イベントへの協力	坂戸市健康政策課
E	酒米「さけ武蔵」栽培とオール埼玉ブランド日本酒「醸彩 滝不動」製造・販売	坂戸市農業振興課, JA いるま野, 地元農家, 酒造, 酒販店, 飲食店

表 2 2013 年度のゼミ内プロジェクトチーム

チーム名	内容	連携主体
B	ハーブを活用したフレッシュマンセミナーでの合同授業プログラムの実施	城西大学薬学部薬科学科, 城西健康市民大学, 地域 NPO
C	葉酸多含有作物（小松菜・ほうれん草）の栽培とそれを活用した薬膳レトルトカレーの製造・販売	坂戸市健康政策課, JA いるま野, カレーメーカー, 醤油メーカー, 飲食店
D	高麗川ふるさと遊歩道周辺のお花畑化と「高麗川ふるさと健康ウォーキング」イベントへの協力	坂戸市健康政策課
E	酒米「さけ武蔵」栽培とオール埼玉ブランド日本酒「醸彩 滝不動」製造・販売	坂戸市農業振興課, JA いるま野, 地元農家, 酒造, 酒販店, 飲食店

(2) 本プロジェクトと社会人基礎力の関係

当該ゼミは、元々学生の社会人基礎力の向上を目指していたわけではなかったが、同じく PBL に取り組んでいる他学部教員からの誘いもあり、2009 年度から社会人基礎力育成グランプリでの発表を授業スケジュールに組み込みことになった。当時は、同一大学からの同グランプリへのエントリーが 1 枠しかなかったため、まず学内予選を開催し、その中で 1 位を獲得したチームが同グランプリの関東大会にエントリーする方式をとった。報告者による当該ゼミは、2010 年度、2011 年度、2012 年に関東大会へ出場し、2012 年度に参加した「社会人基礎力育成グランプリ関東大会 2013」において準優秀賞を獲得した。

また、2014 年 3 月には、当該ゼミによる休耕地活用プロジェクトの実践が、経済産業省による「社会人基礎力を育成する授業 30 選」に採択された。

当該ゼミにおいては、社会人基礎力の向上自体を科目の成績評価には用いていないが、受講学生の自己認識を高めるための手法として、社会人基礎力として掲げられている 12 の能力要素に関する自己評価を実施している。

自己評価の方法は、LMS (WebClass) のアンケートの機能を用い、各週の授業終了時に、当該週における自身のプロジェクトへの取り組みについて振り返ることとした。具体的には、12 の能力要素に対応する質問 (12 問) について最高 4～最低 1 の点数を選択するというものである。

自己評価にあたっては、社会人基礎力の 12 の能力要素について直接尋ねてもプロジェクトとの適合性が低いため、質問文を工夫した。また、先述のとおり、本プロジェクトは授業時間以外での活動が多く含まれるため、自己評価にあたっては、前回 (基本的には前週) の自己評価入力以後の自らの取り組みを振り返り、評価を入力するという方式をとった。実際の質問項目については、表 3 に示す。

表 3 社会人基礎力 12 の能力要素に対応した自己評価質問項目

能力	能力要素	自己評価質問項目
(前に踏み出す力)	主体性	あなたは今週のプロジェクトにおいて、自らすすんで取り組むことができましたか？
	働きかけ力	あなたは今週のプロジェクトにおいて、他のメンバーや関わった人々に対して、なにかを働きかけたり、巻き込むことができましたか？
	実行力	あなたは今週のプロジェクトにおいて、取り組むべき目的を設定して、それに向かって行動することができましたか？
(考える抜く力)	課題発見力	あなたは今週のプロジェクトにおいて、現状を分析して目的や課題を明らかにすることができましたか？
	計画力	あなたは今週のプロジェクトにおいて、問題の解決に向けてのプロセスをイメージして、準備することができましたか？
	創造力	あなたは今週のプロジェクトにおいて、考えや行動、成果など、新たな価値を生み出すことができましたか？
(チームで働く力)	発信力	あなたは今週のプロジェクトにおいて、自分の意見を他の人たちにわかりやすく説明することができましたか？
	傾聴力	あなたは今週のプロジェクトにおいて、他の人たちの意見をきちんと聴くことができましたか？
	柔軟性	あなたは今週のプロジェクトにおいて、自分を含むさまざまな人たちの意見の違いや立場の違いを理解することができましたか？
	状況把握力	あなたは今週のプロジェクトにおいて、自分に求められている役割や現在の状況を理解することができましたか？
	規律性	あなたは今週のプロジェクトにおいて、ルールや約束などをきちんと守ることができましたか？
	ストレスコントロール力	あなたは今週のプロジェクトにおいて、自分がストレスに感じた感情をうまくコントロールすることができましたか？

2011 年度は、前期 (11 週) のみ試験的に実施したが、提出率が 53.2% と低かったため、2012 年以降は授業翌日の午前中までに当該週の自己評価を入力した場合のみ、授業の

出席としてカウントするというルールを設けた。その結果、2012年度は60.3%、2013年度は62.9%と、提出率は多少向上した[a]。

3. 自己評価データの分析

3.1 使用データ

本報告では、2012年度及び2013年度の自己評価データを用いる。2012年度は38名・26週分、2013年度は35名・28週分のデータで構成されている[b]。欠席による未入力も母数に含めた提出率は、先述のとおり2012年度は60.3%、2013年度は62.9%であった。

2012年度及び2013年度に当該ゼミに所属していた学生は、2009年度入学生（以下、09生）、2010年度入学生（同、10生）、2011年度入学生（同、11生）である。

本分析における「年次」による比較は、3年次データと4年次データを比較したものである。3年次データは、2012年度の10生及び2013年度の11生で、4年次データは、2012年度の09生及び2013年度の10生で構成されている。

本分析における「年度」による比較は、2012年度データと2013年度データを比較したものである。2012年度データは、09生と10生によって構成されている。2013年度データは、10生と11生で構成されている。

本分析における「チーム」による比較は、2012年度及び2013年度の所属チームのデータを比較したものである。2012年度のチーム毎データは、12A,12B,12C,12D,12Eとして表記し、2013年度のチーム毎データは、13B,13C,13D,13Eとして表記する。また、2年度分のデータがある10生については、年次によって所属チームに変更があった学生が5名いるため、年度別のチーム比較の際には別途表記を変更している。詳しくは、当該部分で説明する。

本分析による「同一学生の年次進行」による比較は、2012年度及び2013年度に当該ゼミに所属していた10生のうち、両年度においてレコードを有する16名のデータを比較したものである。

3.2 年次比較

社会人基礎力における12の能力要素に関する自己評価を3年次生（N=742）と4年次生（N=473）とで比較してみよう。年次による違いに有意差があるかどうかをt検定（Welch）で分析し、まとめたものが表4である。二つの年次間に有意差があり、3年次より4年次が上回っている場合は上向きの矢印（↑）で、3年次より4年次が下回っている場合は下向きの矢印（↓）で表記した。

表4 年次による比較

能力	能力要素	3年次/4年次
アクション	主体性	
	働きかけ力	↑ **
	実行力	
シンキング	課題発見力	
	計画力	↑ ***
	創造力	↑ ***
チームワーク	発信力	↑ ***
	傾聴力	↓ *
	柔軟性	
	情況把握力	
	規律性	↓ *
	ストレスコントロール力	

* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

3年次より4年次の方がすべての能力要素で自己評価が高まると考えられたが、分析結果は項目によってバラつきがあった。主体性及び実行力に関しては、プロジェクトの性質上、3年次から高い平均値が出る傾向があるため、年次による有意差が出づらものと想定される。

一方、傾聴力と規律性については、年次が上がることで自己評価が下がるという結果が出ている。

3.3 年度比較

次に、12の能力要素に関する自己評価を2012年度（N=599）と2013年度（N=616）とで比較してみる。同じくt検定（Welch）で分析し、まとめたものが表5である。二つの年度間に有意差があった項目は、すべて2012年度より2013年度が上回っており、上向きの矢印（↑）で表記した。

表5 年度による比較

能力	能力要素	2012/2013年度
アクション	主体性	↑ ***
	働きかけ力	↑ *
	実行力	↑ **
シンキング	課題発見力	↑ ***
	計画力	
	創造力	↑ **
チームワーク	発信力	
	傾聴力	↑ ***
	柔軟性	↑ ***
	情況把握力	↑ ***
	規律性	↑ ***
	ストレスコントロール力	↑ ***

* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

年度間比較については、計画力と発信力を除いて、2013年度が2012年度を上回る結果となった。本プロジェクトは年度ごとにメンバーが入れ替わる形態となっているため、

a) 提出率は授業欠席により未入力の学生も母数に含んで算出している。また、実際には期限までに未入力の学生についても、授業に参加していた場合は出席扱いとしてカウントしていたため、想定より提出率は伸びなかった。
 b) 9月入学の留学生については、通年で在籍していた年度のデータのみ使用している。

年度間比較の結果は、各年度におけるプロジェクトの特徴を掴む上で参考になる。但し、分析で使用しているデータはあくまでも自己評価であるため、自己評価の点数付けが低い学生と高い学生が混在している。そのことが年度間比較に影響を与えている可能性も考えられる。

そこで、2012年度の09生(N=241)、10生(N=358)、2013年度の10生(N=232)、11生(N=384)という4つのグループ間の比較を分散分析によりおこない、表6に結果を示した。グループごとに他のグループに対して有意差があり、高い自己評価をしている項目について記載している。

表6 年度・学年による比較

能力	能力要素	2012 (09 生)	2012 (10 生)	2013 (10 生)	2013 (11 生)
アクション	主体性		2012(09)***	2012(09)*** 2013(10)** 2013(11)***	2012(09)***
	働きかけ力		2012(09)** 2013(11)**	2012(09)*** 2013(10)*** 2013(11)***	
	実行力		2012(09)*** 2013(11)*	2012(09)*** 2013(10)*** 2013(11)***	2012(09)*
シンキング	課題発見力		2012(09)***	2012(09)*** 2013(10)*** 2013(11)***	2012(09)***
	計画力		2013(11)***	2012(09)*** 2013(10)*** 2013(11)***	
	創造力			2012(09)*** 2013(10)*** 2013(11)***	
チームワーク	発信力		2012(09)* 2013(11)**	2012(09)*** 2013(10)*** 2013(11)***	
	傾聴力		2013(11)***	2012(09)*** 2013(10)** 2013(11)*	2012(09)***
	柔軟性		2012(09)***	2012(09)*** 2013(10)*** 2013(11)***	2012(09)***
	状況把握力		2012(09)***	2012(09)*** 2013(10)*** 2013(11)***	2012(09)***
	規律性			2012(09)*** 2013(10)*** 2013(11)*	2012(09)***
	ストレスコントロール力		2012(09)**	2012(09)*** 2013(10)*** 2013(11)***	2012(09)***

* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

2013年度の10生(4年次)は、すべての能力要素において、他のグループと比較して高い自己評価でしており、自らの1年度前の自己評価と比較しても有意差がでている。一方で、2012年度の09生(4年次)の自己評価は、他のグループと比較して高い自己評価がまったくなく、2013年度の11生(3年生)と比較した際に、低い自己評価として有意

差が出ているものが8項目も出ている。このことから、先に示した年度比較において、2013年度が2012年度と比較して高い自己評価をしている要因は、10生の自己評価の向上に加えて、09生と11生の自己評価の差にあることがわかる。但し、この結果からは必ずしも09生より11生の社会人基礎力が高いとは言えず、むしろ11生の自己評価が高めに、09生の自己評価が低めになされていたと考える方が妥当である。

3.4 チーム比較

次に、チーム間の比較を試みる。2012年度は12A(N=115)、12B(N=146)、12C(N=128)、12D(N=88)、12E(N=122)の5チーム、2013年度は13B(N=191)、13C(N=184)、13D(N=129)、13E(N=112)の4チームである。これらの9チーム間の比較を分散分析によりおこない、表7に結果を示した[c]。グループごとに他のグループに対して有意差があり、高い自己評価をしている項目について記載している。

結果をみると、極端な傾向がわかる。第一に12Aほどの能力要素についても他のチームより自己評価が低い傾向がある。第二に12D、13Dが他のチームより自己評価が高い傾向が出ている。しかし、この結果だけから単純に12Aチームの学生の社会人基礎力が低く、12D、13Dチームの学生の社会人基礎力が高いと判断はできない。たしかに12Aチームに関しては、活動状況の観察や年度末報告書の内容から、チームとしての活動が思うようにはいかず、自己評価が低くなる傾向は理解できるが、12D、13Dチームに関しても、他チームと比較してチームプロジェクトが順調であったとは言えない。そのため、チームメンバーの社会人基礎力の程度というよりも、チームメンバーの自己評価基準の違いとして理解したほうがよい。

一方で、「チーム力の向上」を測るという観点からは、同一チームの年度による違いをみる方法がある。同一チームの年度比較で有意差が出ているのはBチームである。いずれも「チームワーク」分野の傾聴力、状況把握力、規律性、ストレスコントロールといった能力要素において、12Bよりも13Bが高くなっている。

同一チームの年度間による有意差が出ている上記能力要素の平均値プロット図を図1、図2、図3、図4にそれぞれ示す。なお、図のエラーバーは標準偏差を示している。

c) 表が長い「アクション」「シンキング」「チームワーク」の能力ごとに表を分割してある。

表 7 チームによる比較 (アクション)

	12					13			
	A	B	C	D	E	B	C	D	E
主体性		12A ***	12A ***	12A ***	12A *	12A ***	12A ***	12A ***	12A ***
働きかけ力		12A **	12A **	12A *** 12E *** 13E *		12A ***	12A **	12A *** 13E **	12A *
実行力		12A ***	12A *** 12E *	12A *** 12B *** 12C * 12E *** 13B * 13C *** 13E **		12A *** 12E **	12A ***	12A *** 12E ***	12A ***

* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

表 7 チームによる比較 (シンキング)

	12					13			
	A	B	C	D	E	B	C	D	E
課題発見力		12A *** 12E **	12A *** 12E *	12A *** 12B ** 12C ** 12E *** 13E **		12A *** 12E **	12A *** 12E **	12A *** 12E **	12A ***
計画力		12A **		12A *** 12C ** 12E *** 13B ** 13C *** 13E **	12A *		12A *** 12E ** 13C *		
創造力		12A *** 12E **	12A *	12A *** 12C ** 12E *** 13E **		12A *** 12E ***	12A *** 12E *	12A *** 12E **	12A *

* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

表 7 チームによる比較 (チームワーク)

	12					13			
	A	B	C	D	E	B	C	D	E
発信力				12A *** 12B ** 12C ** 12E *** 13B ** 13C ** 13E ***		12A *		12A *** 12E ** 13E *	
傾聴力		12A **	12A *** 12E *	12A *** 12B ** 12E ***		12A *** 12B *** 12C ** 12E *** 13C ** 13E ***	12A *** 12E *	12A *** 12B * 12E ***	12A ***
柔軟性		12A ***	12A **	12A *** 12C ** 12E *** 13E ***		12A *** 12C ** 12E *** 13E ***	12A *** 12E *** 13E *	12A *** 12E *** 13E *	
状況把握力		12A ***	12A *** 12E **	12B ***		12A *** 12B ** 12E *** 13E *	12A *** 12E *	12A *** 12E ***	12A ***
規律性		12A *** 12E *	12A *** 12E ***	12A *** 12E *** 13E ***		12A *** 12E *** 13E ***	12A *** 12E ***	12A *** 12E ***	12A ***
ストレスコントロール				12A *** 12B *** 12C ** 12E *** 13E *		12A *** 12B *** 12C * 12E ***	12A ** 12B **	12A *** 12B *** 12E ***	

* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

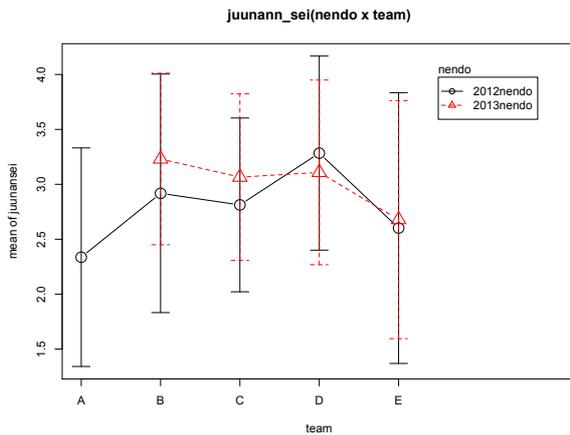


図 1 チーム別平均値プロット図 (柔軟性)

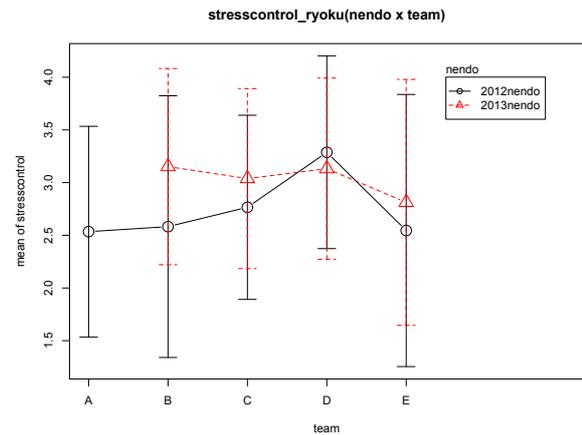


図 4 チーム別平均値プロット図
 (ストレスコントロール力)

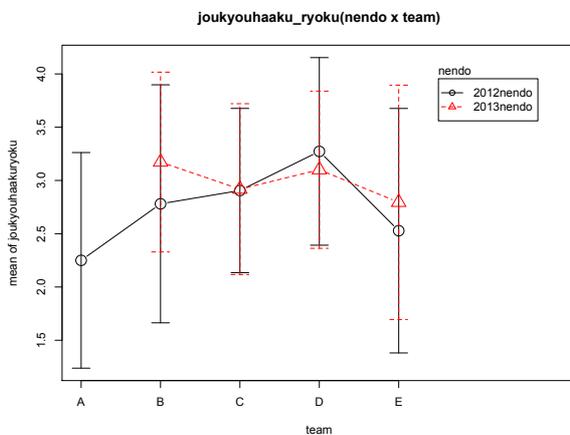


図 2 チーム別平均値プロット図 (情況把握力)

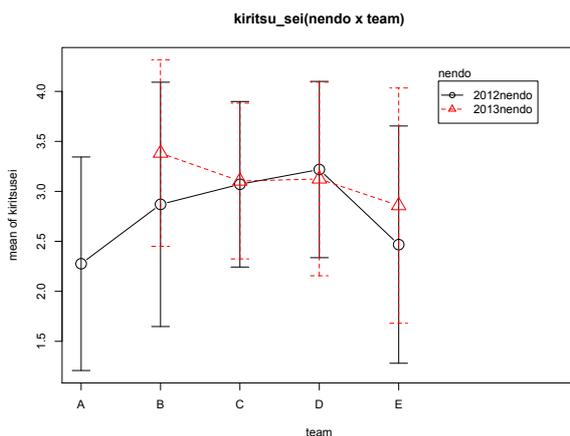


図 3 チーム別平均値プロット図 (規律性)

3.5 同一学生の年次進行による比較

最後に、同一学生の年次進行による比較をみてる。前節の同一チームの年度間比較では、チーム全体の社会人基礎力自己評価が年度によってどのように変容したかを明らかにすることができたが、年度が変わることで4年生が卒業し、新3年生が加わるため、すべて同じメンバーというわけではない。個々の学生が年次進行によってどのように変容したかについては、同一学生のデータによって比較する必要がある。

使用するデータについては、3.1 で述べたように、2012年度及び2013年度に当該ゼミに所属していた10生のうち、両年度においてレコードを有する16名のデータを用いる。

まず、各学生の2012年度と2013年度の自己評価間の有意差について、12の能力要素ごとにt検定(Welch)により分析した。その結果を表8で示す。(N)の欄は、各学生のそれぞれの年度における自己評価提出回数を意味する。↓のマークは、2012年度に比べて2013年度の自己評価が低いことを意味する。

結果をみると、学生によって年次進行における変容に有意差がある能力要素が異なることがわかるが、チーム別にみても、Bチーム、Cチーム及びAチームからCチームに所属を変更した学生において、年次進行による能力要素が優位に変容していることがわかる。

次に、各学生の2012年度及び2013年度における12の能力要素の相加平均を算出し、2012年度と2013年度の相加平均に有意差があるかどうかを、対応のあるt検定により分析した。その結果を表9で示す。

この結果は、当該ゼミでの学びと経験が社会人基礎力における12の能力要素のうち、どの能力要素に変容をもたらしたかを示している。当該ゼミの学生は3年次から実践的なプロジェクト活動に取り組んでいるため、アクション分野については年次進行による変容がみられないが、シンキング及びチームワークの分野での変容があることがわかる。

表 8 同一学生の年次進行による比較 (その 1)

2012 チーム		A				B			
2013 チーム		C		D		B			
学生	s01	s02	s03	s04	s05	s06	s07	s08	
2012(N)	13	20	18	18	20	17	24	25	
2013(N)	8	9	11	21	17	6	15	22	
アクション	主体性	**					***	*	
	力働きかけ	**					***	*	
	実行力	*	***				***	***	
シンキング	課題発見力	**			**		*	***	
	計画力	**					***	*	
	創造力	*						**	
チームワーク	発信力	*			*	*	***	**	
	傾聴力							**	
	柔軟性	**			*	*		*	
状況把握力	*	*						***	
規律性	*	*					*	**	
コントロール力		*					*	**	

* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

表 8 同一学生の年次進行による比較 (その 2)

2012 チーム		C				D		E
2013 チーム		C				D		E
学生	s01	s02	s03	s04	s05	s06	s07	s08
2012(N)	13	20	18	18	20	17	24	25
2013(N)	8	9	11	21	17	6	15	22
アクション	主体性	*	**	*↓				
	力働きかけ							
	実行力	**	**					
シンキング	課題発見力							**
	計画力							
	力創造				**			*
チームワーク	発信力			*				
	傾聴力	*		*↓				*
	柔軟性							
状況把握力	*	**						
規律性		*↓						
コントロール力								

* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

表 9 同一学生の年次進行による比較（平均値の変化）

能力	能力要素	2012/2013 年度
アクション	主体性	0.3312
	働きかけ力	0.0671
	実行力	0.2070
シンキング	課題発見力	0.0180 ↑*
	計画力	0.0111 ↑*
	創造力	0.0012 ↑**
チームワーク	発信力	0.0086 ↑**
	傾聴力	0.3247
	柔軟性	0.0011 ↑**
	状況把握力	0.0337 ↑*
	規律性	0.1634
	ストレスコントロール力	0.0013 ↑**

* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

4. おわりに

本報告では、休耕地活用という地域における実践的な課題をテーマにした PBL 型ゼミにおける学生の社会人基礎力の変容について、学生の自己評価データを用いて明らかにしてきた。PBL において学生たちの取り組み姿勢、意欲といったものが質的に大きな変容をもたらすことは、授業を実践するなかで経験的に幾度も理解してきたが、それを数量的に分析する機会はこれまでなかった。自己評価という限定的なデータではあるが、学年、年度、チームによる相違、同一学生の年次進行による変容が、有意な差で存在することが理解できた。

現在、様々なかたちの PBL 型授業の実践が取り組まれているなかで、その成果を把握するための手法の一つとして、本報告で用いた学生による自己評価データとそれを用いた分析が参考になれば幸いである。

他方、データの収集方法及び分析手法については、まだまだ未熟であることは否めない。本報告の内容をたたき台にして、学生の社会人基礎力の変容に関する分析が進展していくために、今後の分析を進めていきたい。

《正誤表》

- ・「2. 休耕地活用プロジェクトと社会人基礎力」見出し後の
2行
→隠し文字設定ミスのため2行とも削除.
- ・表8（その2）の学生欄 s01～s08
→s09～s16に変更.